

くわしたじょうあと
桑下城跡

所在地 瀬戸市上品野町
(北緯35度15分24秒 東経137度08分19秒)

調査理由 国道363号線改良工事

調査期間 平成19年8月～20年3月

調査面積 4,000㎡

担当者 小澤一弘・宇佐見守



調査地点 (1/2.5万「多治見・猿投山」)

調査の経過 本遺跡は国道363号線の改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成19年8月から20年3月にかけて実施した。調査面積は4,000㎡で、城の搦手にあたる部分の調査になる。

なお、平成17年1月から3月にかけて実施した1次調査では、丘陵西端部の1,000㎡を調査し、南側と西側に曲輪と考えられる平場多数と北側に武者走りと思われるわずかな平坦面を確認している。

立地と環境 桑下城跡は瀬戸市の北東部にある品野盆地の北東、水野川と蟹川にはさまれた標高約210mの丘陵上に立地する平山城で、規模は東西約220m、南北約100mを測る。

周辺の遺跡としては、西の低地に上品野蟹川遺跡(縄文～戦国)、東の谷を挟んだ丘陵上に桑下東窯跡(戦国)、さらに東の丘陵斜面上に上品野西金地遺跡(縄文～江戸)、また、南東の水野川を挟んだ標高約330mの尾根線の上に品野城が所在する。

江戸時代の地誌類によれば、桑下城は品野城主松平内膳(信定)の家老である永井(長江)民部の居城とされている。蓬左文庫には、正保年間から承応年間(17世紀半ば)にかけて描かれたと考えられる古城絵図が品野城とともに残っている。

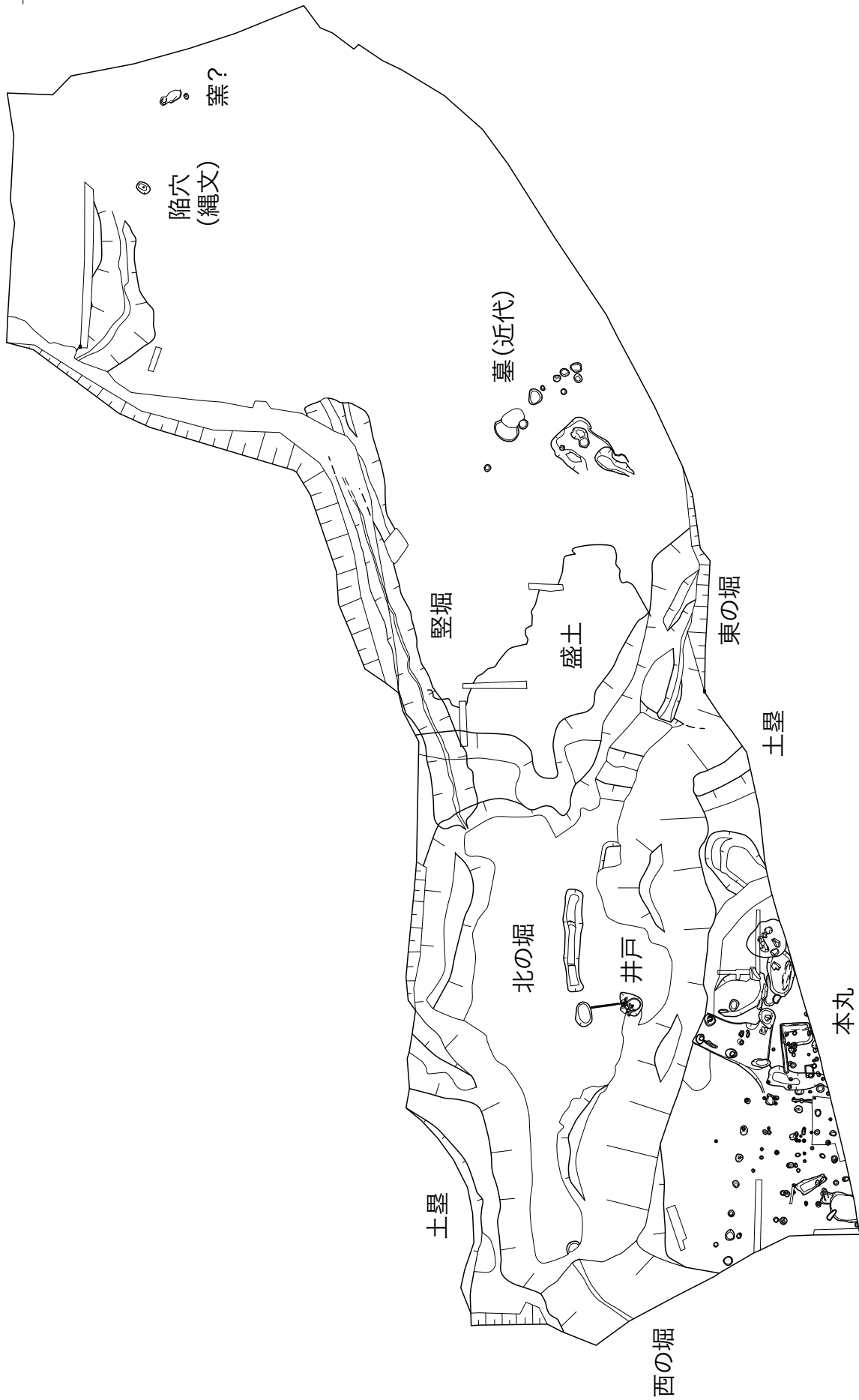
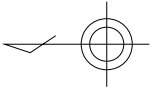
桑下城が所在する品野は、美濃・三河国と国境を接し、さらに信濃国に続く中馬街道が通っているため、織田・松平(松平衰退後は今川)の覇権争いの最前線となった地である。そのため、城は上品野の集落を見下ろす南側を重視し、多数の曲輪を配置している。また、桑下城を館城(平時の城)、品野城を詰め(戦闘時の城)と関連づける考えもある。

調査の概要 調査は、調査区をA区(本丸の北部分と本丸を囲む堀)とB区(本丸北東方向にある平場と東に続く斜面)に分けて実施した。

本丸 西端と北端中央は、平場の確保と西の堀の急峻化を目的とした埋め立てがなされており、西端の埋め立ては深いところで2mになる。また、北東端に残存する土塁の一部を断ち割った結果、土塁は土盛りにより作られたのではなく、削り出して作られていることが判明した。これらのことから、本丸は丘陵頂部を削平し、その時に出た土砂で浅い谷を埋めて作られたと考えられる。なお、盛土の下や土塁の中から瀬戸産の陶器などが出土していることから、築城に先行する人の営みないし城の大幅な改修が想定できる。

本丸北東端に現存する土塁は幅約5m、高さ約1.5mを測る。この城の北東部は丘陵が続く、防衛上最も手薄な場所であるため、北東部のみ土塁を築いたとも考えられる。しかし、本丸北西端に遺構が全く展開しないことと、北側にある曲輪が本丸からの大量の土砂で短期間に埋められていることから、本丸北側には土塁が巡っていた可能性が高い。

本丸からは、大小合わせて100近い遺構を検出したが、ほとんどは直径60cm以下のピットであり、その多くが掘立柱建物の柱穴と考えられる。しかし、調査が本丸の北部分に



調査区全体図

限られているため、全体がわかる掘立柱建物は北西部分で検出した1間×4間の建物1棟のみで、他には、南端中央で検出した雨落ち溝と埋土に炭化物を多く含む方形土坑を伴う1間×1間以上の建物1棟が想定できるにすぎない。

また、北端中央で検出した1間×1間の礎石建物は、地表面を一段低く掘り下げた場所に作られており、その凹みは南西と南東が開いて通路状になっている。建物直下の曲輪で石組みの井戸を検出しており、その位置から礎石建物を井戸櫓と考えることもできるが、下の曲輪で櫓の礎石を確認することができなかったことと、井戸に付属する施設として、2本の竹でつながった水溜用の土坑を検出していることから、礎石建物は下の曲輪に行くための門であった可能性が高い。

なお、下の曲輪から墨で文字が書かれた川原石が数点出土した。文字は「氏」「多」「那」「忍」「悉」など一石に一字書かれており、一字一石経と考えられるが、出土範囲は散漫としている。また、金属製品として小柄が出土した。

他には、南西部分で屋外炉と思われる集石遺構と北東部分で廃棄土坑である大型土坑を3基(004SX・005SX・071SX)検出した。071SXは円形をした浅い土坑で、陶器類が多数出土した。004SXは東西に長い楕円形をした浅い土坑で、人頭大の円礫が多数出土した。円礫の大部分は花崗岩だが、被熱により赤く変色しているものが多い。また、004SXの下層で井戸の可能性のある円形をした深い土坑(088SE)と東西に長い楕円形をした浅い土坑(087SX・090SX)を検出した。088SEの炭化物層からは、巨石や陶器類が投棄された状態で出土した。090SXは礎石建物から続く通路の一部であるが、底から緑黒色をした拳大の川原石が多数出土した。これら大小の石は、他所から持ち込まれたものである。使用目的を考えると、土塁の土留め、石つぶて、庭石などの可能性がある。当時本丸北東部に土塁を築山に見立てた枯山水の庭園が作られており、005SXなどの大型土坑はその庭の池の痕跡の可能性はある。

堀 調査前の地表観察でも、本丸北側にある池(水堀)につながる堀状の凹みを本丸の東西に確認することができたが、調査の結果、東西の堀は薬研堀(東の堀は一部箱堀)、北の堀は箱堀であることが判明した。そして本丸東の堀の北側に新たに縦堀を検出した。

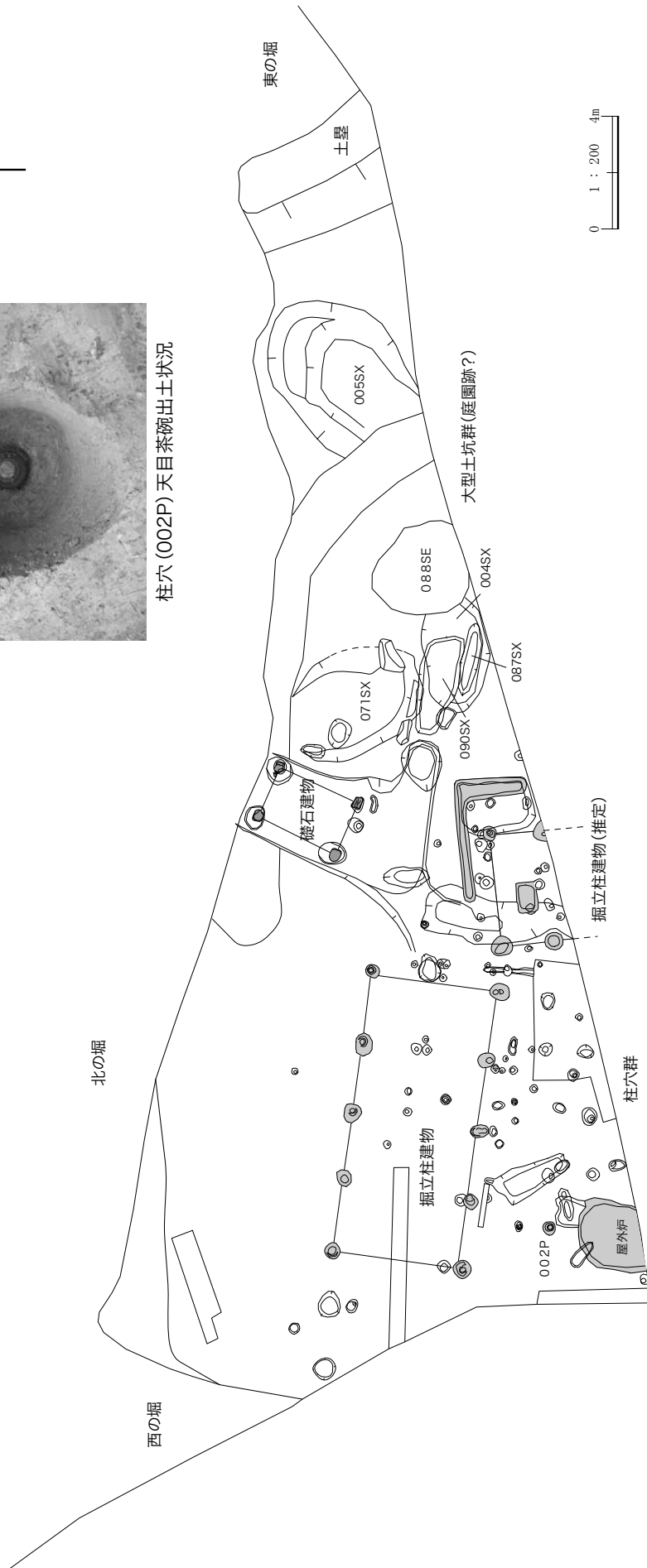
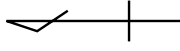
東の堀は、幅約6.4m、深さ約2.7mを測る。北西部分は箱堀、南東部分は不整形な薬研堀をしている。南東に行くに従って浅くなり防御機能は低くなる。堀の外側(北側)には堀を掘削した時に出た土が土盛りされている。本丸の北東部分にあたる堀からは、陶磁器類



調査区遠景(北より)



本丸全景(北東より)



本丸 主要遺構図

の他に金属製品・石製品・木製品が出土した。陶磁器類は中国産青磁碗・白磁皿、常滑産甕、土師質の皿・内耳鍋などの出土はあるが、大部分は瀬戸産陶器(古瀬戸後IV新～大窯2)と窯道具(匣鉢・挟み皿など)である。瀬戸産陶器は明らかな使用痕を残すものはわずかで、窯道具の大量出土とともに隣接する桑下東窯跡との関係を考慮する必要がある。金属製品では本丸側の斜面から鉄鏝が出土し、堀からは本丸から投げ入れられたかのような刺さった状態で和鏡と石臼片が出土した。木製品としては、建築部材と考えられる角材や丸太材に混じり皿や漆塗りの柄杓が堀より出土した。

西の堀は、幅約8m、深さ約3.1mを測る。きれいなV字形をした葉研堀である。底は北の堀より50cm以上高くなっており、水堀であった北の堀の水が西の堀を通過して南の曲輪に流れ込まないようにになっている。

北の堀は、幅約12m、深さ約4mを測る。西部分の外側に削り出しによる土塁状の高まりが見られる。中央から東部分は自然の谷地形を利用して作られている。出土遺物としては、陶器類の他に漆塗りの椀、下駄、柄杓、陽物などの木製品が出土した。

今回の調査で新たに東の堀のさらに北側に竪堀を検出した。竪堀は葉研堀をしている。一部東の堀を掘削した時に出た地山ブロックで埋められており、東の堀掘削以前から存在していたことがわかる。堀からは窯道具・土師質の皿などが出土した。この堀の検出により、従来城外と考えられていた東の堀の北にある平場が城内になることが判明した。なお、葉研堀は平場までで、東斜面になると自然の凹みになってしまう。東斜面にはさらに北側に陶器類を含む浅い溝がある。

和 鏡 本丸北東側の箱堀の埋土下部から突き刺さった状態で出土した。周囲に土坑などを掘



菊花双鶴鏡

り込んだ痕跡がないため、堀が埋没する過程で本丸から投げ込まれたか、転落した可能性が高い。鏡は「菊花双鶴鏡」とよばれる白銅鏡で、径11.3cm、身内径11.1cm、重さ386.8gを測る。全体に黒味をおびているが、これは銅・錫・鉛の合金である青銅の中で、錫よりも鉛の成分が多いためである。背面の文様は、中央に亀形の鈕と、鈕上方に嘴を接して向かい合って飛ぶ二羽の鶴を配し、残りすべてを菊で埋め尽くしている。それぞれの文様が非常にシャープで細密に表現されている。菊は八重菊を配した重ね菊になっているが、花弁が鑄立つようになるのは、鑄型への文様施刻において、先の鋭利な篋、鉄篋を用いたためである。また、鈕の孔には、絹と思われる白い繊維が残っていたため、紐を通して使用していたと思われる。和歌山県の熊野速玉大社に所蔵されている古神宝の鏡18面の中の1つに、今回出土した鏡と文様構成や意匠が類似したものがある。速玉大社の鏡は明徳元(1390)年に將軍足利義満と諸国守護らが熊野十二社に調進した神宝類の一部で、京都の工房で製作されたと考えられている。このことから、桑下城出土の鏡も京都の同じ工房で製作されたものの可能性が高い。

ま と め 今回の調査区は、本丸の一部(北部分)とそれを囲む堀と城の周辺部の限られた地域であったが、調査の結果、桑下城は従来考えていた以上に大規模な城であることが判明した。特に本丸の2mにおよぶ整地や礎石建物、幅12m・深さ4mにおよぶ巨大な箱堀などは、当時の最先端の技術で築城されている。さらに堀から出土した和鏡が京都の將軍家ゆかりの工房で作られた可能性が高い優品であることを考えると、在地領主である長江(永井)氏の力だけでこれだけの規模の城が築けたとは考えられない。1558(永禄元)年織田信長が品野城を攻撃した際、これを撃退した武將に送った今川義元の感状が残っていることから、桑下城の改築に今川氏が関与した可能性は高いと思われる。今川氏が尾張から撤退した1560年以後利用された痕跡がないことから、桑下城は織豊系城郭登場以前の尾張の城を考える上で大変重要になる城だと言える。

(宇佐見 守)



堀 全景



屋外炉



礎石建物



掘立柱建物雨落ち溝 遺物出土状況



廃棄土坑 (071SX) 遺物出土状況



廃棄土坑 (004SX) 円礫出土状況



小石出土状況 (手前090SX, 奥088SE)



井戸 (088SE) 遺物出土状況



礎石建物直下の曲輪で検出された井戸



礎石建物直下の曲輪出土の石



西の堀(薬研堀)と北の堀(箱堀)



東の堀 断面(箱堀,奥に薬研堀が続く)



北の堀 崩落部分



北の堀 漆椀出土状況



東の堀 遺物出土遺物



東の堀 和鏡出土状況



東の堀 石臼出土状況



竪堀 断面